

主の日に備える

(テサロニケの信徒への手紙 1 5章 1～11節)

テサロニケの信徒への手紙が書かれたのは紀元 50 年ごろで、大体、イエスさまが十字架で亡くなられて、20 年後くらいと考えられています。この手紙には、当時、終わりの日への関心が信徒たちの間で強く、「主の日」とよばれる復活の主イエスの再臨の日がいつ来るか、それにどう備えたらよいかということがまとめられています。この個所を読みますと、福音書に記されているイエス様ご自身の語られた終わりの日についての教えをパウロが忠実に引き継いで、それを「主の日」として信徒たちに語り、その終わりの日が、盗人が夜、突然やって来るように不意に人々を襲うのですが、あなたがたは福音を受け入れたことによって、終わりの日についての教えと何よりも御子イエス・キリストの贖いの恵みを受けているのだから、心配するには及ばない。何が起きるかを知らされ、すでにそのための対策、—という言い方は、少しおかしいですけれども、9 節以下に、「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いに与らせるようにさだめられたので」あり、怒りの日として臨むであろう神の審判に対して、弁護者であり、贖い主であるキリスト・イエスに結ばれているゆえに、信仰と愛を胸当てとしてつけ、救いの希望を身に着けて目覚めていようと呼び掛けています。これは当時の都市国家の防備についた市民の様子を引き合いに出しているのですね。夜に、不意に、主の日がやってきたとしても、あなたがたはすでに備えをしているのだ、その目覚めている姿が証となるのだということをパウロは語りたかったのです。没後 20 年あまりの当時の状況と、約 2 千年をへだてたわたしたちの状況と

は様々に異なることがあります。この教えから、わたしたちは何を聴きとることが求められているのでしょうか、終末についての聖書の教えに聴きながら、備える生き方について思いをいたしたく願っています。

テサロニケの信徒への手紙の4章18節から5章11節までは、これからくる終末、平たく言えば世の終わりというキリスト教の時の枠組みにふれています。すでにパウロは、再臨以前に召された信徒たちについて不安に思っている人々に、眠っている人たちについては無知でいてほしくない。希望を持たない他の人のように嘆き悲しまないために、と語り、どのような希望がキリスト・イエスにおいてわたしたちに与えられたかを思い起こさせようとしていました。これについては先々週、説き明かしをいたしました（ホームページに残っていますからご覧ください）。5章に入って語られるのはキリストの再臨、「主の日」と呼ばれる日です。「主の日」は旧約聖書の預言書にもよく登場する大切な教えですが、今日、教会や神学ではあまり語られることがないように思います。ひとつには捉えようがない、観測のしようがない神による幕引き、終わりを扱っているからです。このような終末が来るといふ教えは現代に生きるわたしたちにとってはリアルにとらえることが困難です。むしろ、人間の手によって地球が終わるのではないかという予測がリアルです。毎年のようにすさまじい豪雨を経験し、夏も35度以上が珍しくないなど地球環境が異変のレベルに達していることは、わたしたちの皮膚感覚で理解されることです。70億を越した人口が地球に負荷をかけ続けています。いずれ資源の奪い合いの戦争が起こり、そこに核が持ち出されれば更に壊滅的な状況が訪れるかもしれません。こういう未来予測はリアルにできますが、聖書が伝えるような終末理解、人の子が雲に乗ってやってくる、ラッパの音が聞こえると、空中で引き上げられたわたしたちと

再臨の主が会うというたぐいの世の終わりが来るという描写は神話的で理解に苦しむところだと思ふのです。わたしはこの「空中で」というところを、ようするに、地上と地続きではない場所で、わたしたち人間の立つステージから引き揚げられたところで救いが用意されていることだと考えています。すなわち、神のなさることとしての救いであって、わたしたち人間の側がイニシアティブを取る出来事ではないということが重要なのです。だからこそ、目覚めて、備えておれ、ということが、信徒たちの側の応答の業となるのです。

ここでパウロは、テサロニケの信徒たちに向かって、信仰と愛を胸当てとしてつけ、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいましょう、と語りました。これは都市国家を守る武装を自分で用意できた市民たちの戦装束ですが、この姿、つまり外敵に対して城壁の上で武装して守りに立つ姿を、終わりの日を待ち望む姿勢になぞらえたのです。ヘブライ人への手紙の 11 章に、信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです、という有名な言葉がありますが、これらの御言葉から考えますと、信仰生活はパントマイムに似ていてはいないでしょうか。パントマイムとは無言で、道具や舞台装置などを一切用いることなく、自分の体だけで料理をしているさまだったり、電車に乗っているさまだったり、ガラスを拭いているさまだったり表現して見せる芸術ですね。上手な人がやると本当にそこに窓ガラスや、扉があるように見えるものです。見えないのに見えてくる。主の日がいつ来るかは分かりません。イエス様すらその日がいつかは分からない、父だけがご存じであると言っておられます。ですから、主の日に備える所作、いまわたしはパントマイムといいましたけれども聖書に教えられたことにのっとなって、生活を整えてゆけば、そこに見えないドアや、ガラス窓が現れるように、信仰のかたちとしての「主の

日」、「神の国」とその到来というものが浮かび上がってくるのではないのでしょうか。信仰と愛を胸当てとしてつけ、救いの希望を兜としてかぶり、という表現は、そのことを指しているのです。いつそれが来るかは分からない、しかし、それは陣痛に喩えられているように、時が満ちれば必ず起こり、新しい事態を生み出す。そのことは確定しているのです。キリスト教は時のスケールに関しては「はじめ」と「おわり」を「創造」と「終末」という基準ではっきりとさせている宗教です。いつかは神の主権のなかに収められている出来事です。逆に言えば、人間の放埒や戦争によって世界が破壊されて終わりが来るのではないということを聖書は語っています。戦争は起きるだろう、人と人とが争いあうことも止まないだろう、地上の世界、朽ちる世界が、朽ちないものを継ぐことは出来ない、と聖書は明言しています。終わりの言葉は神が語られる。始められた方が終わらせる。ゆえに、終末の日は主の日と呼ばれる審判の日、完成の日とされているのです。それがいつか分からないので、もう来ないかのようにふるまいがちですが、それは正しい態度ではありません。行く末を遠く見ることをあきらめるのではなく、目を覚まし、歩みを確かにするために、神さまは、わたしたちに聖書を通して手がかりをきちんと与えています。ひとつは、イエスさまご自身の「目を覚ましていなさい」という教えですね。パウロはそれを今回語り直しているのです。一方で、パントマイムに喩えましたように、またパウロが都市国家の武装市民の姿を描き出したように、主の日に備える態度としてわたしたちに与えられているのは、このような礼拝ですね。今回、準備をされていて思ったのですが、この礼拝のことを、わたしたちは主日礼拝と呼びます。主日とは「主の日」ですね。わたしたちにとって日曜日は、「主の日」であり、ユダヤ教の安息日にあたるものです。ユダヤ教では土曜日であったそれが、主イエス・

キリストが復活され、罪と死を滅ぼされた朝を記念して日曜日に変えられました。安息日は主にささげられた日として労働が禁じられていました。人間の働きの地続きの日として扱ってはならないという厳しい戒めです。創造主の前に呼び出されて、御言葉によって整えられる日として、わたしたちがリ・クリエイトされ、リ・フォームされて、神の民として新しく整えられて日常へと送り出されてゆく命のリズムを刻み込む日です。そして、それは終わりの日の象り（かたどり）、備えの日でもあります。それはやがて神の決定によって起こされる終わりの日に、すべての者たちが働きを止めて、御前に出なければならない日に備える準備の日でもあるのです。さらに、この主日礼拝の連なりが、キリストの御生涯にそって一年に拡大された教会暦も、終わりの時に備えるわたしたちの生き方をトレーニングします。11月の第4主日、この日を終末主日、よく知られた言葉では「収穫感謝日」と呼びますが、それは魂の刈り入れを思う日です。この終末主日の翌週から、アドベントが始まる。このながれは古い年が終末主日、収穫感謝の日で終わり、その翌週から、アドベント＝到来を意味する新しい年の始まりを迎え、わたしたちは蠟燭に一本ずつ火をともしながら、世の闇を照らすまことの光の到来を待ち望む。主の再臨を待ち望む。そのような生き方、時の理解の仕方を繰り返し学ばされる。わたしたちの救いの希望がどこにあるかを確認する。それが、パウロが言うように、この世に絡めとられずに、互いの向上に努めることの許された群れ、主に召し集められた群れである教会のあるべき姿なのです。やがて来るであろう「主の日に備える」ことは、主日礼拝に生きる日々の先にある出来事です。それがわたしたちの応答の業であることを弁えておきたい。今日の、この主の日が、わたしたちの一週間の始まりの日として位置づけられることで、復活の主に見え、お言葉を戴き、この方を礼拝し、罪の赦しと

復活の福音によって整えられたわたしたちが、平日へ、キリストの弟子として派遣をされてゆく、この命のリズムを生み出すことを弁えておきたい。それがパントマイムのように、わたしたちの周囲の人たちに見えない神を指し示す働きとなっていることを覚えて、証としての礼拝の生活を大切にしたいと願います。

お祈りいたします。

神さま、暗い夜の間も守られて、新しい朝、コロナの不安がちまたにあふれるなか、わたしたちを復活の主とその消息に生きる者たちの群れのなかに招いて下さり、わたしたちの救いの希望がどこにあるかを教えて頂きましたこと、心から感謝いたします。どうか、わたしたちもテサロニケの信徒たちのように、信仰と愛を胸当てとし、救いの兜を身に着ける、つまり、神の言葉を身に着け、それを支えとすることで、あなたに用いられる弟子として、良き働きを示すことが出来るように導いて下さい。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン